

東遊記後編

橘南緯（春暉） 十卷十冊 角書き 諸國奇談 前編寛

政七（1795年） 後編同九（1797年）刊

文中に「少しにても火のけがれたる食は其まゝにて、食しよくしたまはずといふ。」とある。毎夜丑の刻に米三升を供すといわれ、生米か炊いた米かの議論もあるが、ここでは「火のけがれたる食は」となっている。

東遊記後編 第三の「善光寺」の末尾

又此邊へんより東北の方五六里の遠とがくしさに、戸隠山を見る。此邊とがくしての高山なり。余は戸隠山へは遊ばず。其あたりの人に聞きくに、戸隠の山中に洞穴ほらあなあり。其洞穴の中に昔むかしより大蛇住り。是を九頭龍くずりようごんげん権現と云。唯今ただいまに至り、往古おうこよ戸隠とがくしの社僧しやそう毎朝まいてやう九頭龍くずりよう権現へ御膳ごぜんを供くふ。件くだんの洞の中へ入れ置おきて歸かへるに、明朝みやうてうは其膳部ぜんぶ皆食くひ終りてありとなり。此こゝ権現ごんげんの靈驗れいげんいちじるしき事言葉ことばにつくし難がたしと云。誠まことに奇異きいの事となり。

東遊記後編 第四の「戸隠山」

○戸隠山
とがくしやま

戸がくし山は、信濃國しなののくにの北の方によりて、越後へ出る方にある。信州しんしゅうは惣体山國そうたいにて、連山波濤れんざんはたうのごとくなるに、此戸隠山とがくしは基もとを別べつにして、京近邊きんべんにていはゞ生駒山いこまを望むがごとくなる山なり。手力雄命たぢからをのみことを祭れりといふ。天照太神天てんせうだいじんの岩戸にこもらせ給ひける時、衆神寄玉しゅうじんよりひて神楽かぐらを奏そうし玉ひければ、太神岩戸ちからをのみことを少し内より開き給ひてさしのぞかせ給ふ所を、手力雄命岩戸ちからをのみことの戸はなを引放ち抛捨玉なげすてひしが、此戸隠山とがくしに落たり。それより戸かくを隠したる山といふことにて、かく名附たりとぞ。世俗つたへのいひ傳なり。扱此山ほらあなに大なる洞穴あり。其穴の中に大蛇あり。九頭龍くずりようごんげん權現ごんげんと名附て、此山の鎮守ちんじゆの神なりとぞ。頭かしら九ツ有る龍にて、神變しんべん不思議しぎの靈神れいじんなり、社人しやにん毎日穴まいにちあなの中に神供じんぐを備へて、其まゝうしろをかへり見ず退き歸しりぞること也。翌日よくは其神供じんぐの物一ツも残らず無しと也。少しにても火のけがれたる食しよくは其まゝにて、食しよくしたまはずといふ。又甚梨なしを好み給ふ。誰たれにても願心ねがひこころある人、梨を穴の内へ入れて祈念きねんする

に、早其間に穴の中にて梨を咬み食ふ音聞ゆ。人皆恐れて眼をふさぎ、つひに其形を見たる者はあらず。諸の願望叶はずといふ事なし。上方にても梨をたちて、虫喰歯の痛を治せんと立願する人あり。遠方ながら奇効ありと云。君錦先生孔雀楼文集の中にも、此事をのせて、慥に聞えたる事を云へり。余も信州に遊びけるとき、此山に登りて奇を探り、且又權現に梨を獻じたく思ひしかど、時寒気の頃にてえ登山せずやみぬ。昔は諸國人身御供などといふ事もあり。又其外にも人民の食する食物或は肉類などを直に食する神社多かりし様に語り傳ふるに、多くは武州鴻巣明神の由来の如き事にて、毒蛇悪獣神明の寶殿により居て、食を貪る事なりけるを、人智ひらけ、文華盛んに成りて後は、毒蛇悪獣の策やぶれ、今にては人食を直に食ふ神社は、狐を祭れる社の外にはたえて無き事なるに、九頭龍權現のごときは奇の奇なる事なり。

註 「近代デジタルライブラリー」に有朋堂文庫の「東

西遊記・北窓瑣談」が公開されている。90コマ目

に善光寺の一部として、100コマ目に戸隠山とし

て。

東遊記後編 第五の「名山論」。

「山の高きもの」として富士に始まって「其餘ハ碌々論ずるに不足」まで二十五の山名があげられているが、後世の『甲子夜話』には「山之高者」として、これらに浅間山、大山、妙義山が加えられた章句がある。

名山論

余幼きより山水を好み他邦の人に逢へハ必名山大川を問ふに皆各其国々の山川を自賛して天下第一という甚信し難し既に天下をめぐりて公心を以て是を論するに山の高きもの富士を第一とす又餘論なし其次ハ加賀の白山なるへし其次は越中の立山其次日向の霧嶋山肥前の雲仙嶽信濃の駒ヶ嶽出羽の鳥海山月山奥州の岩城山岩鷲山也是に次て豊前の彦山肥後の阿蘇山同国久住山豊後の姥か嶽薩摩の海門嶽伊豫の高峯美濃の恵那嶽御嶽近江の伊吹山越後の妙高山信濃

の戸と隠かくし山さん甲か斐ひの地ち蔵ぞう嶽ひたち常つくば陸をうしうの筑かう波み山こま奥か州まの幸か田ま山こま御み駒こまか嶽か

等ら也や其その餘あまハ碌ろく々々論ろんずるに不足たりず伯はく耆しの大だい山さん上じやう野のの妙めう義ぎ山さんハ余あま

いまだ是これをみず其その高かう低ていをを知しず出で羽えの羽は黒くろ山さんののこことときき其その名な甚し

だ高たかけれども其その山さんハ甚しだ低ひし都みやこの鞍くら馬ま山さん程ほどにも及およびがたし

湯ゆ殿との山さんも叡えい山さんよりは低ひかるべくみゆ是こゝハ佛ぶつ神しん垂すゐ跡しやくの地ちゆえ

に参さん詣けいの者もの多おほきによりて其その名な高たかき也なり（後のち略りやく）

註 「名山論」は新日本古典籍データベースで「東遊記
後編」を検索。「4 東遊記, 東北大和算, 刊, 5冊,
マイクロ/デジタル, 100238120 書誌詳細

collections 画像」の100コマ目と101コマ目。